幼稚園の道徳教育実践記録「こころのじかん」

学校法人三宅学園・海田幼稚園　岡本　美佳

柏市の麗澤幼稚園は、昭和五十五年の開園以来、道徳教育に力を入れています。同園が目指す「心の基盤づくり」の教育目標と実践は、保護者の方々から強い支持を受けてきました。そしてその精神を受け継いだ一人、岡本美佳先生が、広島県の海田町で幼稚園における道徳教育の導入に力を尽くしています。岡本先生に、これまでの経緯を話していただきました。

▲海田町の海田幼稚園・三宅理事長が道徳教育を導入したのは、岡本先生が麗澤幼稚園で実践経験を積んだことを知ったからである。

一．ゼロからの立ち上げ

「道徳教育は幼児期においてもとても重要なので、ぜひわが園に取り入れたい」と、海田幼稚園の三宅雄次郎理事長から声をかけていただいたのは二〇一四年のこと。広島県に生活の基盤を移し、最初の子育てを始めた頃です。同園は元々道徳教育を行っていたわけではないので、何のベースもない幼稚園で道徳教育を一から行うことに対して、不安や戸惑いがありました。しかし「自分にできることは精一杯させていただく」という麗澤幼稚園での学びもあり、私はお引き受けすることを決めました。

道徳教育を始めるにあたり、大事にしたいと思ったのは「楽しい」という気持ちを子どもたちにも先生方にも持ってもらえるような保育にしよう、ということでした。

今でこそ、先生方や保護者から「こころのじかん」と題した道徳の保育について理解が得られていますが、初めの頃は「幼稚園で道徳って何をするの？」「どんなことを教えるの？」という疑問の声も多くありました。しかし私は麗澤幼稚園での経験から、幼児期における道徳教育の重要性を確信していたのです。

二．ピンクの心と黒い心

麗澤幼稚園では、普段の保育の中で「ピンクの心」「黒い心」という言葉をよく使っていました。いわゆる思いやりの心と利己心を二つの色にたとえ「誰でもピンクの心と黒い心を持っていて、使った心が使った分だけ大きくなっていくよ」と、伝えるのです。すると毎日の外遊びや、子ども同士の会話の中でも「ピンクの心」「黒い心」が多く出てくるようになりました。そして「どうしたらピンクの心が大きくなるか」「黒い心になっているときにどうしたらいいか」と、心の使い方を子どもたち自身が理解し、自発的に行動するようになるのです。喧嘩をしている子がいたら「今は黒い心になっているから ピンクの心になって謝ったほうがいいよ」と仲裁に入る子がいたり、困っている子を見かけて「私はピンクの心を大きくしたいから助けてあげたい」と私に教えてくれる子がいたり…。こうしてトラブルを自分たちで解決すること、友達同士で感謝の言葉を伝え合うこと、小さい学年の友達のお世話をすることなどが自然にできているように思いました。

保育の終わりに、カードの中のその日のテーマにピンクの心のハンコを押して、視覚的にもピンクの心が大きくなったことを示している。

三．『こころのドリル』の活用

そのような子どもたちの日常の様子を見ていく中で、幼児期においても道徳教育を行うことは、子どもの心の成長に大きな影響があること、また子どもたち同士の関わりを見ることで、道徳教育が人間関係の形成にも必要であることがわかったように思います。この麗澤幼稚園での経験が、海田幼稚園における道徳教育の基盤となりました。「こころのじかん」の保育は麗澤幼稚園で使っていた『こころのドリル』を活用しています。

テキスト『こころのドリル』コミニケ出版発行

『こころのドリル』について

こころのじかんでは、『こころのドリル』の中にある「ありがとう」「ごめんなさい」「いのち」など三十のテーマの中から、毎回一つをピックアップして、そのテーマに基づいた活動を考えます。主に『こころのドリル』はまとめとして、保育のおしまいの頃に読んで聞かせ、全体で確認を行っています。ドリルにはそのテーマに沿ったイラストが毎ページ書かれているので、そのイラストも用いて全体で確認することで、視覚的にも大事なことがわかり、より子どもたちが理解しやすいように感じます。

四．六年を経て感じられる手ごたえ

「私、こころのじかんが大好きだから、もっともっとやりたい！」五年目の時、年長の女の子が、残り二回となったこころの時間の保育前に言ってくれた言葉です。回数を重ねて子どもたちからこのような言葉をもらうことが増えてきました。麗澤幼稚園と同じように、海田幼稚園の子どもたちの中にも、大きなピンクの心が育っていっていることを感じる毎日です。私にできることは限られていますが、心を込めて保育にあたり、少しでもピンクの心を育てるお手伝いができたらと思っています。

五．幼児期における道徳教育発展への願い

小中学校では道徳が教科化され、世間でも「道徳」が注目を集めるようになりました。そして、今後この流れは幼稚園にも及ぶのではないでしょうか。人生の基盤となる心の成長を育む幼児期にも、道徳教育が大切で、大きな意味を持つことを、私自身が痛感しています。同じように道徳教育に取り組む保育者の方々と、共に幼児期の道徳教育を発展させていきたいと思います。それが広島県、ひいては日本の道徳力の底上げに繋がれば、と願っています。

◆次号に、岡本先生の具体的な道徳指導の実践を紹介します。

麗澤幼稚園の道徳教育と岡本先生の思い出

麗澤幼稚園では、「①優しく思いやりのある子②ありがとうと言える子③自分のことは自分でする子」の３つを教育目標に掲げ、取り組んでいます。幼稚園の一日は、年長組当番による国旗掲揚で始まり、朝の会では、その日の活動や園児の様子に合わせて『こころのドリル』の中から一項目を選んで読み、それに関連した担任の経験談等も交えながら話をします。

年長組になると個人持ちとなり、担任は声を合わせて一緒に読みながら、しっかりと子どもの心の引き出しに入れていきます。活動では、異年齢交流を大切にしており、園だけの兄弟関係を意図的に作り、１年間同じペアで活動やお弁当パーティーをします。年下を思いやりいたわる心や、年長を憧れ慕う心が育まれ、翌年は順次恩送りがされます。そんな園生活の中で、岡本美佳先生は、一人ひとりの園児をよく観察し、ここぞという時に適切なアドバイスや褒め言葉をかけ、見事な心育てのできる先生でした。忘れもしないのは、ある年の発表会のこと。発表会直前にインフルエンザが流行し、美佳先生のクラスだけが学級閉鎖に…。ところが迎えた発表会当日、他クラス以上の出来栄えで、日頃から子どもたちの心育てができていたからこそと、演じた劇の内容と共に、感動で涙を流しました。感性豊かなお人柄で、ご自分の心の声を「詩」として表現し、ノートに書き溜めていた姿も印象的です。（園長・岡田喜）